

今月の谷口雅春先生のお言葉

すでに素晴らしいわが子と信じて祈る

「祈り」とは神に泣きつくことではない

「祈り」と云うのは神社のまえに手を合わせ、頭を垂れて、自分の欲しいものをくどくどとならべて、それを下さいと泣きつくことばかりではないのであります。無論これも、祈りの一種でありますけれども、これでは、あまり効果はないのであります。

祈りと云うのは、命宣でありまして、自分の「生命」の底深く、「宣る」即ち宣言することでありまして、

「わたしは不幸であります。神様たすけて下さい」と泣きつくことは、自分の「生命」の底深く「わたしは不幸であります」と宣言していることになりますから、「不

幸」が来るように祈っているようなものであります。いのちの底深く念ずることが、形の世界にあらわれて来るのが、「心の法則」でありますから、不幸の人が幸福になろうと思つて、「私は不幸であります」と云えば益々「不幸」と思うとおりに「不幸」が出てまいります。だから幸福になりたい人は、「神様、私は幸福です。有りがとうございます」と先ず御礼を云うのが好いのであります。これこそ、幸福をいのちの底から宣言するのでありますから、「幸福を実現する祈り」だと云えるのであります。

(新装新版『真理』第1巻229～230頁)

常に心の底深くに思うことが「祈り」である

そこで皆さんが、何事かを常にわれわれが心に思う度毎に、その何かを思う其のことが、「祈り」ならざるものはないのです。何をわれわれが二六時中、あるいは四六時中心に、命の底深く思っているかどうか、ということが問題なのであります。たった十五分間明るいことを考えて、後の二十三時間四十五分の時間、暗いことを心の底で考えているならば、それで「神様は私の祈りを諾いて下さらない」とこういうのは無理なのであります。心の底深く暗いことを祈っておりましたならば、その暗いものが集まって来るといことになるのであります。

(新装新版『真理』第3巻321頁)

願いが成就する「祈り」とは

およそ、その人の祈りが成就すると、成就しないとには、根本的に三つの条件に適うかどうかと云うことが問題なのであります。

第一には、先ず「何に」祈るかということであり、誰に祈っても大きく訳ではありません。次には「何を」祈るかということであり、更にその次には「如何に」

祈るか。この三つの条件がととのわなかったならば、幾ら神に祈ってもそれは聞かれないということになりますのであります。

およそ祈りによっていろいろの奇蹟を現わした人たちの中で、一番素晴らしいのは、日本では弘法大師、そして外国ではイエス・キリストであると、私は考えるのであります。このイエスが如何にして祈りによって奇蹟を現わしたかといいますと、其の極意を、弟子がイエスに訊いたことがあるのであります。

その時にイエスがこういつて答えた。

「汝等祈りて何事にも求むる時、既にそれを受けたりと信ぜよ。即ち汝はこれを得ん」と答えられました。(中略)ここに祈りの方法についての根本が教えられていることに注意しなければならぬのであります。

若しここに病人がありました、

「神様どうぞ私を憐れみたまえ。私は病気でこんなに苦しんでおります。どうぞお助け下さい。こんなに苦しいのであります。神様は無限の愛でありますから、どうぞ私をお癒し下さいませ。」

と、こういつて祈ったと致しますと、そのイエスの教えた法則に当てはめて見ますと、どういふことになるかと言いますと、

「汝等祈りて何事にも求むる時、既に病氣を受けたりと信ぜよ、即ち汝はこれを得ん」といふことになります。「神様、私は病氣で苦しんでいるのです。既に病氣を受けているのです。どうぞ助けて下さい」と、こういつて祈る人は、「既に受けたり」と信じておりますから、その「既に受けた」と信じている病氣が形に現れ、いつまでも病氣が消えないことになるのであります。

(新装新版『真理』第3巻316～318頁)

どんな時も子供の本当のすがたを信じて

京都の石川さんの坊っちゃんも一昨年その坊っちゃんが一高(編註：現在の東京大学教養学部)の理科を受けられたのですが、^{すべ}にられました。に^{すべ}られたけれども、少しもお母様はおかこち(編註：嘆くこと)にならなかつた。そうして実相を見て、「うちの子供は神の子であるから入学しても入学しなくとも少しも価値が相違しない。昨日の子

供は今日の子供と同じ価値だ」と喜んでいられたのであります。(中略)人間の本来の相、^{すがた}本当の相は神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相、その^{すがた}本当の相を見て、それを^{すがた}拝み出すようにしますと——
 拝むといつても、あながち^て掌を合わさなくてもむろんよいのですけれども——心で子供を^て拝む——「うちの子供は本当に神の子であつて立派な子である。放つておいても大丈夫である。決して悪くなるようなことはないのである」と子供を信じて心で^て拝むのであります。この石川さんの奥さんの子供をよく信じておられるのにはわたしは常に感心させられるのであります。一度、一高の入学試験に失敗せられましてからも、その坊っちゃんが、時々勉強しないようなこともあられたようでしたけれども、「うちの子は決してまちがいはないのだ。神の子だから決してまちがいはないのだ」といふ大きな信念を持って子供を^て拝んでおられた。その大きな信念を持っておられました結果、その翌年にはチャンと一高へ入学せられたのであります。

(『生命の實相』頭注版第30巻39～40頁)